

奈良のこと（古都）

（3） 東大寺（大和国金光明寺）

奈良に来た観光客の大半は、東大寺の大仏さんと奈良公園の鹿がお目当てのようである。

* 金光明四天王護国之寺 *

聖武天皇が長男基（もとい）親王の菩提を弔うため、728年に建てた「金鐘山寺」が東大寺の前身と云われており、現在の三月堂（法華堂）の北半分がそれに当たるようである。741年に詔が発せられ全国に国分寺が建立されるが、その大本締めとして金鐘山寺が昇格して「大和国金光明寺」（金光明四天王護国之寺が正式名称）となる。

国分寺は全国に70寺建立されるが、国家の平安と国民の幸福を護ることを目的としている（天下泰平・万民豊楽）。

奈良時代のお寺ではお葬式をしない。（今でも同じ）

南都6宗（法相、俱舎、三論、成実、華嚴、律）は平安2宗（天台、真言）と異なり、学問的な仏教の研究が目的で、現代の大学に近い存在であった。国家鎮護を願って、仏教を通じて先進文明の導入を計り、政治や文化の発展に寄与した。（政治的には、平安遷都の時に政治への介入が嫌われ、お寺は奈良に取り残される事になる）

平安2宗は民衆個人の救済を目的としており、勿論お葬式もする。東大寺や興福寺には檀家が無く、寺の僧侶が亡くなると、他宗に頼んで葬式をしなければならない。

* 東大寺 *

都の東にある大寺なので、東大寺と呼ばれるようになった。南大門に「大華嚴寺」の額が掲げられているが、東大寺の別称で華嚴宗のお寺である。



奈良時代のお寺は通常南向きに建てられている。南側の南大門がお寺の正門である。

主な建造物は、南大門（国宝）、大仏殿（国宝）、三月堂（国宝）、二月堂（重要文化財）、転害門（国宝）、鐘楼（国宝）、戒壇院、正倉院（国宝）、などである。

（正倉院は明治になって東大寺の手を離れ、国の所有となっている）

国宝や重要文化財の仏像も多く、大仏、南大門の金剛力士像、戒壇院の四天王塑像、三月堂の不空絹策観音や執金剛神立像、などである。

修学旅行の記念写真の定番は、鏡池の前で大仏殿をバックにして撮るが、ラッシュにな

ると順番を待つ子供達でごった返し、大変な騒ぎである。余談になるが、鏡池名前の由来は池の中に弁天様を祀った島があり、この島に渡る道と島の形が「手鏡」に似ているからである。

大仏殿（金堂）

聖武天皇の御代には良くないことが重なった。天災（地震、台風、干魃）に襲われたり、伝染病（コレラで藤原不比等の4人の息子達も死んでしまう）が流行ったりする。天皇は己の不徳により世の混乱が起こったものと考え、仏の力借りて国を治める決心をし、743年に大仏造営の詔を発した。

盧舎那仏の放つ光は宇宙の隅々まで照らし、あらゆる願いや困難を救って呉れる。通常の仏のサイズは丈六（約3m）であるが、聖武天皇はこの10倍の大きさで作った。十と云う数字には無限大の意味もあり、大きな力を持った仏に国家鎮護、天下泰平、万民豊樂を願ったものと思われる。

大仏の大きさは、座像で約15m（立てば30mの大きさ）である。全身に金メッキが施され、まばゆい姿であったと想像される。

大仏は749年に完成、752年に開眼供養が行われた。この造営に当たり、大勧進・行基が天皇の依頼を受け、勧進を行い全国民の力を結集して完成に漕ぎ着けた。貧しき者も、富める者も勧進に協力した。今も昔も大仏は日本国民の仏なのである。（鎌倉の再建では大勧進・重源が、江戸の再建では大勧進・公慶が、全国を勧進し浄財を集めた。）

大仏殿はその後、二度に亘り戦火に見舞われる。一度目は1180年の「平重衛南都焼き討ち事件」、二度目は1567年の「松永久秀／三好の戦い」で、何れも大仏殿は全焼し、青銅製の仏も熔けてしまう。現在の仏と大仏殿は江戸時代のものである。

大仏殿は創建時には11間（86m）であったが、三度目の江戸の再建時には資金不足のため7間（57m）になってしまう。それでも容量的には世界最大の木造建造物である。また、大仏は膝から下の部分に創建時のものが残っており、二度目の再建（1195年）では金メッキが施されたが、三度目の時には首から下だけを作ってから、約140年間雨ざらしとなっていた。1709年に漸く首が完成したが金メッキは出来なかった。大仏の顔は綺麗であるが、肩から下は錆びて光沢が無いのは、140年間の雨ざらしのせいである。

その他

南大門には有名な「金剛力士像」（運慶、快慶等の作）がある。高さ8.4mで3000個のパーツで出来ている（29人の仏師が69日間で完成した）。南大門も1180年に焼失したが、鎌倉時代に再建されたものが残っている。この再建には重源が活躍した。彼は中国の最新式建築法（大仏様式）を用い、少ない木材で強い建造物を作る事に成功した。800年経ってもびくともしていない。

大仏殿入口石段のすぐ前に立っている「八角灯籠」（国宝・高さ4.6m、日本最大の銅製灯籠）は、二度の火災に耐え創建時のままである。

お水取りで有名な二月堂は1667年に火災で全焼するが、お水取りの法要（修二会）は途切れることなく約1250年の間続けられている。



三月堂は東大寺発祥の地であり、16体の国宝・重要文化財の仏像を有していたが、現在は修理中で、2013年3月までは拝観が出来ない。この間は2011年10月10日に開館した「東大寺ミュージアム」で、本尊の不空絹策観音や塑像の日光、月光菩薩などが拝観出来る。

左の写真は不空絹策観音の被る宝冠である。世界三大宝冠の一つで2万個の宝石で飾られている。(残念ながら、宝冠は修理中で、当分は見る事が出来ない。)

2013年4月に予定の三月堂の修理完成を期待しよう。

戒壇院の塑像四天王像(国宝)は場所が離れているため、見て貰う機会が少なく残念である。

鐘楼と鐘は共に国宝で、鐘の重量は27トンで重さでは日本第3位である。鐘と八角灯籠は何れも創建時のままの姿で、大仏の下半身と同じ銅が使用されている。

正倉院には9000点の御物があり、毎年秋の正倉院展(奈良国立博物館)で約70点が展示される、一度出ると10年以上再登場は無い。2011年の第63回では有名な香木「蘭奢待」が出展され、信長や秀吉の切り取った跡を確かめる事が出来た。

手向山八幡宮

三月堂の南にある手向山八幡宮は東大寺の守り神である。

ここは紅葉の名所で、菅原道真が「この度は幣(ぬさ)もとりあえず手向山 紅葉の錦 神のまにまに」と詠った。神社の中程に「道真の腰掛石」があり、「ここに座ると頭が良くなると云い伝えられている」これを説明すると、修学旅行の生徒は我先に座って写真を撮る事になる。年配の観光客も似たようなものである。

聖武天皇は東大寺の守り神として、九州・宇佐の八幡宮・総本宮「宇佐神宮」を勧請した。宇佐八幡の分社第一号である。

明治の神仏分離まではお寺とお宮は一心同体で、お寺には必ず守り神があった。例えば、興福寺と春日大社、薬師寺と休ヶ岡八幡宮、天理の内山永久寺と石上神社などである。

(明治の革命で多くが廃寺になった。天理の内山永久寺も廃寺となり、僅かに「割拝殿(国宝)」が石上神宮に残るのみである。)

(色染・昭35 坂東久平)